

国学院大学学報

平成29年 2月 第654号 定期号(毎月10日発行) 1部20円

「紀元節、大倭を懐ひて詠める」
 松風や 邊世の如し。
 歌傍山 山の宿根に
 類ふて聴く
 (「漢やまのこ」)
 釈 暹聖

祭儀
 ▽月次祭・祈年祭
 3月1日(水) 午前10時 神殿
 ▽卒業奉告祭
 3月17日(金) 午前10時 神殿

国学院大学博物館

来場者が15万人を突破

本学博物館の来場者が1月30日で15万人を突破した。平成25年4月の名称変更から3年10カ月での大台達成となった。15万人目は京都府から同博物館の特別展「火焰型土器のデザインと機能」(2月5日まで開催)を見るために来館したリンダ・クロフォードさん。元大学講師で日本に住んで47年目。セレモニーで記念品を贈られたクロフォードさんは、自身が15万人目になったことについて「びっくりした」と述べ、「今日は土器と土偶を見るために来た。すごく好き。神道にも興味があり、日本人が神棚を通して何を、祈っているのかを知りたい」と話した。次の企画展「祭祀と神話―神道入門―」については「英語の仏教の本は多いが神道の本は少ない。ぜひ来たい」と関心を寄せた。

同博物館の及川聡副館長・学術メディアセンター事務部長は「平成26年度から文化庁の博物館連携事業に取り組み、平成27年度には体制が刷新された。展示企画の充実、外部団体との連携などが進み来館者が増えている。今回の火焰型土器展では、新潟から出陳された国宝など魅力的な資料と当館の特徴が活かされ、大きな反響を呼んでいる。こうしたことが来場者数の15万人突破をより早めた」と話した。



来場者15万人突破を記念して、リンダ・クロフォードさんに感謝状が贈られた。右は博物館のマスコットキャラクター「うさぎ」。

A日程入試に1万4千人

― 志願者数 3年連続で増加 ―



2月2日から4日まで実施された本学A日程入学試験には、過去最多となった昨年度を大きく上回る1万4402人が出願した。同試験の出願者は、3年連続の増加。

今年度は、長野市、静岡市に新たな試験会場を設け、渋谷、たまプラーザ両キャンパス、既存の地方入試会場札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・広島・福岡とあわせて試験を実施した。

一般入試全制度では、手書き志願票による出願を廃止し、全てweb(インターネット)出願に変更となった。また、4日に実施されたA日程(学部学科特色型)では、経済学部3学科に加え、文学部外国語文化学科・哲学部の2学科で併願を可能とした。

1月13日に出願が締め切られた大学入試センター試験の成績を利用するV方式(1期)も順調に志願者を集め、昨年比133%増の7220人が出願した。志願者の増加について田中裕巳総合企画部入課長

は「社会学系統の学部の人気が回復しつつある中、文学部や神道文化学部でも志願者の大幅な増加が見られる。本学のブランドが受験生の増加につながっているのではないかと要因を分析している。

なお、本学の一般入学試験は、2月27日(月)にB日程入試が行われる。センター試験利用型入試では、V方式(1期)の出願を3月4日(土)まで受け付ける。

研究ブランディング事業採択後、初の国際シンポ



浄見宮司による一人舞
 実演された二人舞

昨年11月に文部科学省の推進する「私立大学研究ブランディング事業」タイプB(世界展開型)の一つに「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信―が採択されたから初となる国際シンポジウムが、1月21日午後1時30分から渋谷キャンパス百年記念館記念講堂で開催された。

古事記学に関するシンポジウムは今回で3回目。今回は、「神話の詩学―舞・歌・型―」を総合テーマに掲げ、「受け継がれる神話的世界―宮地嶽神社の『ツクシ舞』と巨石古墳―」「神話の詩学」の2部構成。第1部では福岡県の宮地嶽神社から浄見護宮司(昭48卒・81期神)と舞い手を招き、古くから同社に伝わる

「古事記学」の拠点推進形成

ツクシ舞の実演を行った。ツクシ舞はこれまで神事芸能として人目に触れない環境で奉納されていたが、近年はアメリカでも公演がなされるなど、伝統ある芸能を多くの人に知ってもらう機会を設けている。実演では、一人舞・二人舞・四人舞の3種類が披露され、来場者は華やかな衣装や荘厳な音楽に熱心に耳目を傾けていた。

第2部では、渡邊卓研究開発推進機構助教とフランス高等研究実習院教授のアラン・ロシェ氏が講演。つづいて平藤喜久子研究開発推進機構准教授の司会で、浄見氏・渡邊氏・ロシェ氏による公開討論が行われた。会場には、過去最多の約250人が来場し、盛況のうちにシンポジウムは幕を閉じた。

「交声曲 海道東征」コンサート 15組30名様を御招待

4月19日(水)に東京芸術劇場コンサートホールで開催される「交声曲 海道東征」コンサートに15組30名様を御招待します。

応募方法等、詳細は7面をご覧ください。

主な内容	
2面	平成28年度 補正予算成立、平成29年度学年暦
3面	成人加冠式 新成人の門出祝う
4・5面	特集・充実の就活サポートで輝く未来を
6面	院友会 新年院友交歓会
7面	インフォダイジェスト、卒業生対象に初の調査
8面	学生リアル調査

みはるかすもの
 昨年は邦面の興行成績が大いに振った。「シン・ゴジラ」や「君の名は。」を鑑賞した人も多いことだろう。そうした中で、小規模公開から瞬く間に劇場数を増やし、ロングランを続けている邦画がある。アニメ映画「この世界の片隅に」である▼この世界の片隅にによる原作漫画は、平成21年まで連載。当時から高い評価だったが、原作を忠実に再現した映画化でさらに注目を集めている▼18歳の主人公浦野ですが、昭和19年2月に広島市から軍港の街呉市に嫁ぐ。嫁ぎ先での生活を中心に、21年1月までを描く。徐々に戦況が厳しくなり生活を圧迫。さらに呉で原爆を目撃する。終戦の玉音放送も聴き、被爆した広島を歩く▼戦争に振り回され、苦しい生活を送り、本人も傷つきながらも、その中で彼女の普通の生活は続く。終戦という現実にも驚き、その先の生き残る道を進む▼現在の生活はどうであろうか。先月誕生したトランプ新政権によって米国内の分裂が表面化。この影響が世界に波及しないはずはなく、今後の世界状況に目が離せない。我が国に戻れば、周辺国との懸念は山積みだ▼後年、現代はどのような時代と受け取られるのか。平和な時代と異なるのか、はたまた暗黒時代の序章と見られるのか。それでも「この世界の片隅に」誰もが普通の生活は続け、生き続ける。どのような状況下でも、地に足を着け、自分の意思で歩み続けたい。